

心化粧

ひらあやまりびと
平謝人

『眼光紙背に徹す』眼の光を紙の裏側まで徹することで、物事の本質をつかむ、という古からの諺である。この世は紀元後二千年を優に超えているが、多くの本質はほぼ不変であるように感じる。人に焦点を当てても争いは絶えず、権力、支配、いつ脅かされるか分からぬという畏怖の念からの抗いが、目に見える表面的な事の大小は別として変わらず続いている。まさに日々、縄張り争い、食糧確保や襲われるかもしれないという恐怖心からの浅い眠りといった、やっと生きながらえてきた原始人と本質的には全く同じであるように感じる。まさに高等ではあるが動物なのであろう。その本能を覆うために、理性を纏い、法律や貨幣等のルールという定めで善悪の判断ができるよう、何もなければ争うことしかできない人間を無用なことから避けさせるための手段を、それもまた同じ人間が生みだしてきた。常識というまやかしの言葉が生まれたのも人間を統制するには好都合だったに違いない。原始人とかわからない人類が存在し発展し続けなといけないうこと、目的が何なのかは、考えても妄想してもきつと辿りつけない。これこそは神のみぞ知ることであり、人としての生を受けたものとしてそれを全うすることに一心一意に向き合うこと、動物という本質は永久に変えられないが、最も高い次元で思考できる唯一の動物に与えられた、本能だけでは途絶えてしまう「生」を繋いでいくということ、それがまさに、使命であることに間違いはない。そして、そのために一人の人間として生まれた瞬間から意思に関係なく人生という舞台にあげられ、与えられたその役を、動物であるという本質を受け入れた上で、唯一、人間ができる意味ある功徳に『演じきる』こと、それが使命を全うすることなのだ。

「まもなく3番線に総武線各駅停車三鷹行きが参ります。白線の内側までお下がり下さい」満員電車という不快な、そして、物理的には多くの人がいるにも関わらず存在しないかのような、さながら空谷の登音のような護送船が多くの人間を会社に運んでいる。「あと少し早く起きればこの不快を避けることができるのに。と、何年思い続けているだろう、情けない」きつと、大半の人間が同じようなことを考えている。日々、何もかわらない、ただ惰性で生きているかのように時間だけが闇雲に過ぎていく。なんとも輪郭をはっきりできない、曰く言い難い、もやもや感の中で。でも、それが、圧倒的な人間の普段である。伊藤遣心けんしんもその船の中の等しくうだつのあがらない一人であった。

「大手町ヒルズまで！」「A案にしる。やることはチャットするから」カチ、カチ！とキーボードを颯爽と叩く、運転手には耳障りな音を響かせながら六本木から大手町に向かう

高次^{たか}偉^ゐ鳳の日常である。庶民を見下すようなマンションに住み、働く会社も場所も超一流、頭脳明晰、進取果敢と幾らでも高尚な表現が出てくるような人物、揶揄^{たがやう}して言えば、『上級国民』、が偉鳳という人間を表すのに的を射ている。生き馬の目を抜く、が座右の銘である、偉鳳自身も他者の見立て通りの自覚であった。

偉鳳は飛ぶ鳥を落とす勢いで人生を謳歌していた。というより、そうでないと壊れてしまいそうな自分との闘いであったのかもしれない。偉鳳はその日暮らしという喩えがびつたりの家庭に生まれた。都内の所謂、団地暮らし。父も母も働いてはいたものの休みとなれば、競馬、パチンコとギャンブルが生きがいの、親ガチャで言えば外れの典型的な類であった。人生は勝ち負け、なめられるな、金がないのは世の中のせい、と、とてもとても、学校では教えてはいけない言葉が飛び交う家庭で育った。面白いもので、カエルの子はカエルであり、日本に生まれたら日本語が、異国に生まれればその国の言葉が自然と話せるように、そして、生まれた瞬間から目の前にいる人の思考、思想が大きく人格のベースに影響してしまうものである。抗おうとしてもそうそう変えられるものではない。三つ子の魂百までも、とはよく言ったものである。偉鳳も同じである、人生は勝ち負け、なめられるな、しか考えていないような子であり、「夏休みどこ行くの？ 中学受験するの？」など、裕福でなかったことも相まってそんな会話をする同級生達と交わることは一切なかった。ただ、自分が置かれている環境で望むことさえできない、やり場のない怒りは日々感じていた。それでも、毎日、親が主役の喜怒哀楽劇場のような家であり、その唯一の観客であった偉鳳にとってそれが全てであり、ある意味楽しかった。誕生日やクリスマスでもない普通の日に急に豪華な夕食、時にはパチンコに負けた原因で大喧嘩、たまの幕間に出てくるケーキを何十分もかけて食べたことも鮮明に覚えていた。そんな父も偉鳳が高校を卒業して暫くしてあっけなく人生の幕を下ろしてしまった。父という主役を失った母は別人のように笑顔が消え、祖母の介護のこともあり実家に引きこもってしまった。偉鳳は、親への感謝はあるものの、親の人生は負け組だと。皮肉なもので毎日のように勝ち負けといひ続けてきた親の言葉通りに親を評していたし、そういう偏見を植え付けてしまったのもまたその親である。偉鳳は高校卒業後、勝つだけを目標に一年間必死に勉強やバイトに励み大学への進学を果たした。大学に入ってからもサークル、合コンなどにいそしむ圧倒的な烏合の衆には目もくれずその生活スタイルを変えることはなかった。その奮励の甲斐もあり、偉鳳は志望の企業に就職することができた。就職してからも、一将功成りて万骨枯る、を心情とし、のし上がるためだけに、雨垂れ石を穿つ思いで、サラリーマンに徹し続けた。そして、一念通天、天か亡き父に届いたかはわからないが、異例の若さで見事、部長まで駆け上がった。まさに飛ぶ鳥を落とす、勝ち馬であった。『お金と一緒で仕事も寂しがり屋、出来る人に集まる。』の典型で、日々、多くの仕事が偉鳳に集まり、それらを的確に裁い

ていった。あたかも会社は俺がいなければ回らないという慢心が偉風の原動力でもあった。『勝ち馬に乗る』かの如く、多くの人たちが偉風に群がった。会社に縋っているような上司や先輩社員達も「彼に任せています」と免罪符的な表現が口癖だった。所謂、権威バイアスである。日本最高学府の教授が言ったことはみんな疑いもなく信じ、仮にそうでない結果となっても多くの人が信じていた、と抗弁できることから自分への責任を回避できる、要は打算である。こういう状態は悪い組織で起こる傾向が強く、一人の虚像を創りあげること、あたかも順調に回っているかのような状態に、そして、何時かにトラブルが発生しても、その責任の矛先を作っておける。祭り上げられてしまった本人も知らぬうちに過信を積み重ねていってしまう、その虚像は見た目とは裏腹に吹けば飛ぶ、何かあれば一瞬で壊れてしまう、まさに砂上の楼閣のような。偉風もそれに近づきつつあったが、そうなりつつあることに気づける目も、余裕も、教えてくれる仲間もいなかった。そんな偉風は責任の矛先要員としておあつらえ向きであった。そもそも、協調、協働などというスタンスはなく、独断専行、人は信用しない、唯我独尊では、そうなることは当の本人以外予感していた。そして、その必然は「嵌める」という形相で偉風に襲いかかる。偉風は新規取引において数億円の損失を出してしまったのである、偉風はまさに餌食となった。その会社の情報に誤った内容が含まれていたことを知らずに偉風は契約を進め、結果、数ヶ月も経たぬうちにその会社は倒れたように倒産。情報が最新ではなく一年以上も前のものであり、その間に役員変更など重要事項において不穏な様相へと変化していたが、そこに偉風は全く気づくことができなかったのである。普段の冷静沈着、猜疑心の塊である偉風であれば、部下からの情報など鵜呑みにせず自ら裏取りを行うはずであるが、今の地位ではまだまだという完全に出世欲に溺れ、盲目と化してしまっていた。偉風を知る人物なら到底考えられない、まさに偉風は画龍点睛を欠いてしまったのである。部下など他関係者はその会社の虚像について既知であったことが後に発覚することとなるが、それは偉風という軒先掃除が終わった後の、全てが後の祭りであった。数億円の損失を会社としてそのまま放置できるわけもなく、拙速に偉風に責任の矛先を向け、事態収拾、風化に急いだ。偉風が故意ではなかったことは明らかであったため解雇はされず、窓際と揶揄されるような部署の平社員への降格となった。表面的には左遷という形をとったが、会社として解雇に出来なかったのは、偉風が過失であったこともあるが、偉風が、他関係者が全てを知っていた事実を把握していたことから、会社、組織が嵌めたという理由で告訴するリスクがあったこと、対外的な会社の保身のため、であった。処分決定までの間は、「俺は嵌められた。なんでもっと慎重に。いつもの自分なら……悔しい。でも、人生終わったわけではない、なんとかなる。いや、もう終わりだ……」と、心の浮き沈みを何度か繰り返していたが、水は低きに流れるように気持ちには下に下へと沈んでいってしまうものであり、訴え

るかもという会社の心配をよそに当の偉風は、身の置き方が決定された時には「ふざけるな！」と拳をあげる余力もなく、怒りさえ感じることができない、まさに、抜け殻となつてしまつていた。それでも、去ることはできなかった、何故なら、偉雄にとつて、会社は唯一の居場所であつたから。

偉風が異動した部署に窓はなく、数名いる社員も定時を待つだけの異様な淀んだ空間であつたが、余計な会話もあの事件の詮索もなかったため、ある意味、偉風にとつては安堵できる場所であつた。時薬という言葉があるが、偉風はそれのみに縋っているような状態であつた。

偉風はその日も定時と同時に無の空間を後にした。時薬が効き始め、ようやく感情が戻りつつあつた偉風は、街中の全ての物や行き交う人々の表情にも気づける、花壇の香しい匂いさえも感じられるぐらいのペースで、一步一步、それを踏みしめるように、その感覚を思い出すかのように、地面の反発を感じながら、緩歩していった。異様な光線が乱れ飛ぶ繁華街を抜け、その先の片隅で偉風はある別の光と出会うことになる。偉風からすれば底辺、最も負け組に位置づける部類、所謂、ホームレスである。以前であれば吐き捨てるように見下し立ち去るだけだったが、その日は何かが違つた。蝶が花蜜に誘われるようにその場に腰を落としていた。「おう、お前さん、どうした？」彼らは身構えることなく偉風を受け入れてくれた。「ここではみんな同じ人間、何者でもない。気楽にしてくれ。顔が怖いけどなんかあつたのか」怖い顔に映つたのは、なんで底辺と交わつてしまつたんだという偉風自身への苛立ちが出ていたに違いない。反面、感情が戻りつつある証拠でもあつたが、「抜け殻のくせに、まだそんな感情があるのか」と、偉風は自分を戒めた。「まあ、そう怖い顔するな。いいことないぞ」その一言で偉風の腰も自然と地面に据えられた。気が持ちが和らいだせいかコンビニの明かりに気づき、サラリーマン気質が残つていたこと、人見知りも相まって、偉風はその場から一旦逃避。いつの間にかコンビニで調達した一升瓶を人生の先輩であろうみんなの前に置いていた。「ありがとな、そんな気を遣わんでもいいのに」、偉風はその言葉に気恥ずかしさを覚え、頭をかいた。「身なりもしっかりしているし、いいとこのサラリーマンか。しかし、今の日本は大変だよな。経済も低迷したままだし、相対的貧困はG7で最も多いし、このままだと日本がなくなつてしまう可能性は否定できないな」何を底辺が偉そうにと、まだ以前の驕りが残つていた偉風はそう思つてしまつたが、その後も、政治、環境などほぼ全ての社会問題に対してみんなが語り出した。偉風もそれらには詳しくあつたが、彼らの話はそれを優に超えていた。一方的な視点でなく複眼的な視点で、考え方も交えての語りであり、目を閉じれば会議室と勘違いしそうであつた。「なんでこんなに」と偉風は思つたが、考えてみると彼らには時間が有り余る程ある。毎日、四大紙、スポーツ新聞、ゴシップネタの週刊誌に至るまで、あらゆる情報を得るこ

とができる。その上、それら情報を鵜呑みにせず、自ら思考していることが本当に凄かった。「なぜ、そんなに詳しいのですか」と思わず偉風の口を衝いて出た。「今はこんなだけでも、社長とかだった連中ですね。みんな、戻れるならもう一度社長に戻りたいと思ってるよ。やっぱり、気になっちゃうんだろうね、世の中の情勢は。考えても意味がないこともわかってるんだけどね。自分の会社の経営が厳しかった時は情報を見られなかったし、自分の会社に都合よくしか捉えることができなかった。あの時、冷静に、そして、謙虚に他者の意見も聴いて経営を判断していたら違っていたかとも思っている奴らも多いよ。後悔先に立たずってやつだね」底辺と蔑んでいた方々の経歴、そして発せられた多くの言葉に偉風は度肝を抜かれた。と同時に自分に頂門の一針を放った感覚であった。その瞬間、偉風は今でも纏わりついてた鎧をおろし身構えることなく、なめられるという恐怖心や、つきまとう猜疑心など心の丈を吐露していた、生い立ちやあの小説のような出来事も。みんな、黙って聴いてくれた、真剣な眼差しで。彼らからすれば、働いていた頃の社員が悩みを打ち明けている姿と偉風を重ねていたのであろう。「お前さんは十分やってきた、俺たちに言われてもどうかと思うかも知れんけどな。生い立ちは確かに大変だったと思う。逆に、俺たちは何不自由なく生きてこられた部類だから、安易にお前さんの境遇をわかったような発言をしていたら勘弁な。でも、お前さんよりもっとひどい環境で、もがき苦しんでいる人たちもいるってことも忘れてはいけない。可哀そうなどという驕った気持ちじゃなく、それに比べマシというどうでもいい優劣でもなく、まず、自分は有難いんだと感じてほしい。自分を過信しないこと、それ以上に人に感謝すること、当たり前なんてことはこの世の中にはないということ、蛇口を捻ればいつも水が出るのも、電車が動き移動ができるのも、紐を引けば電気がつくのも、ゴミが道端から消えているのも、必ず誰かのお陰があるということ、そんなことに気づけることが、本当に大切なんだよ。そして自分がだめな時は甘えて逃げていいことも覚えておいてほしい、人はどうしても自分の心の沈みを何かで戻そうとしてしまう。きつとお前さんも、上司から何かで叱責されたらそのイライラを部下に怒鳴り散らすことで、もとに戻していたことがあるんじゃないか。それは、本当に悲しいことだよ。人は等しく弱い、強くなってる、だから、そんな行為に衝動的にはしってしまう。だからこそ、そういうときは素直に甘えて逃げていい、泣いていいんだよ、そうすれば人を傷つけることもない。お前さんもあの大きなショックを受けた今だからこそ、胸に刻めるんじゃないか。ちよつと人生の先輩の願いと思ってるな」「はい。ありがとうございます」と、偉風は声にならない声を振り絞って伝えた。既に途中から今まで我慢してきた『泣く』というなめられると思っていた行為が堰を切ったように、もう自分では止めることさえ出来ず、嗚咽してしまっていた偉風の姿がそこにはあった。そんな姿を目の当たりにして、「そう、それでいいんだよ。みんな、もらい泣きしち

やってるぞ。弱さをさらけ出すことで心が露わになり互いに同じ人間であることを素直に認めあうことができる。みんなのもらい泣きは悲しいからじゃない、お前さんが一生懸命、生に向き合って、そして、今、心の無用な壁を壊した姿に共感したからだよ」「また、いつでも来な。そうそう、お前さんなんていう呼び方は失礼だった。名前は?」「はい、偉人の偉と鳳凰の凰で、偉鳳と言います」「それは立派な名前だな。その漢字の意味を演じられるような人になれよ。偉は、威張る、驕るじゃないからな。演じられている証は周りにそれが伝わるかどうか、自己満足じゃないぞ。また猜疑心のような弱さの壁ができてしまっても、今日のようにさらけ出して壊せ、な。それでまた演じられるようになるから」偉鳳はぐしゃぐしゃの顔を隠すように深々と精一杯の黙礼をした。そして、偉鳳は感じていた、『偉鳳』として初めの一步を踏み出すことができた。

それから暫く、偉鳳はホームレスの方が言った『演じる』という言葉の意味を問い続けていた。偉鳳を演じる、偉鳳という漢字の意味を演じる、『偉鳳』、偉とは、人として素晴らしい、風とは、人として必要なことを修得している、その二文字を織りなせば聖人に近い、かなりレベルの高いことである。きつと父は違う意味で、俗的に金持ちになれぐらいでつけたんだろう、漢字の意味も調べずに、と、偉鳳は天を見上げ失笑した。されど、この名前を背負って生きていく以上、意味そのままには到底辿り着けないことも、名前負けしていることもわかっている、でも、少しでもそれを意識して行動することはできるはず、折角、気づきを与えてくれたことに感謝する意味でも、『演じる』をやってみようと偉鳳はふと胸に手をあてていた。喜怒哀楽が表しているように、人は良い時も辛い時も、本質的な感情でない二次感情である怒りに覆いつくれされてしまうことさえある。演じるということは何なる時でもきつとその役を演じ切るはずであり、それと同義。日常に置き換えれば、自分が辛い時でもあってもきちんと人に気配りができるかどうか、「そんなこと出来るかな」と不安を感じつつも、少しずつでも、出来ない時があってもいい、と偉鳳は「今のお前ならできるはず。間違っても自分が辛い時に立場が弱い人に傲慢な態度をとることで自分の心のバランスを保つようなことだけはやめよう。あの方が教えてくれたように。そんな時は逃げて泣いて、さらけ出していいんだ」と、自分に暗示をかけるように呟いた。既にその時、偉鳳から恐怖心や猜疑心は消えていた。

いつもの通りの無機質な空間へ、でも、今日の偉鳳は高らかに靴音をならしていた。『演じる』ことの意味を捉え、そして、偉鳳という高い役割への道筋を見出せたからである。「誰しもいきなり高い頂にはいけない。今、与えられた役割と真剣に向き合ってみよう。会社の備品、机ひとつとっても、それを意識せず使える状態を作っておくこと、爽やかな心地よい風が流れていれば、みんなが仕事を円滑に進めることが出来るはずである」

と、偉風は求められている役割に向き合っていた、久しぶりの高揚感だった。

偉風は役割を意気に感じ、日々、オフィス内を巡回し、かつて部下だった社員達にも不具合や要望がないかをヒヤリングして回っていた。「えっ、あの高次さん？」みんな、以前とは別人と化した偉風に驚愕していたが、同時にあんな出来事からの復活に自分も、もつとしっかりしないといけないと多くの気づかされた眼差しが向けられていた。きつと他の誰かが偉風と同じように行動したとしても、やって当然としか思われなかったはずである。飛ぶ鳥を落とす、勝ち馬と評され、そして、奈落の底まで落ちたあの偉風だったからこそ、何か感じるものがあつたのであろう。その眼差しは、きつと、嬉しさでもあつたはずである。偉風は周囲の目に冷たさを感じることや、そして、傲慢な態度をとってきたことへの背徳感が完全に抜けることはなかったし、みんながそんな風に思い始めてくれていることにも気づくことは微塵もなかった、ただただ、一生懸命に役割に向き合うこと、あの意味、贖罪でもあつた。そんな偉風もあの殺伐とした戦場が今では澄んだ空気が漂っているかのように感じられていた。

役割に真剣に向き合うといろんなことが見えてくるものである。オフィス環境は机、椅子や観葉植物などただ物理的なものを新しくしたとしても、それだけでは本質的に綺麗にはならないし、持続されない、と偉風は少しずつ感じ始めていた。そう感じられるのも『偉風』の一端と言っても過言ではないだろう。そんな矢先、ビル清掃等も行う管理会社から偉風に一本の電話が入る。「私、大手町ビルクリーニングメンテンスの高橋と申します。お世話になっております。実は貴社に関してご相談があるのでお時間いただけませんかでしょうか」「はい、私、高次と申します。では、後日よろしくお願ひします」と偉風は何用か、突飛な電話だなとも思いつながら、高橋さんとの面談の約束をした。後日、高橋さん曰く「貴社はフロアによくゴミが落ちていて、トイレも汚いこと、エレベーターのマナーもなっていない、など」、要はクレームであつた。ただ、クレームというより何故一流会社の人間がそんなことも出来ないのかと奇異に感じたからであろうと偉風には思えた。あえて捨てることはないと思うが、気づいたら拾うことさえできないのかという違和感や偉風もエレベーターに乗ることが職性柄多かったが、先に乗っていても開くボタンを押して待つ人もほほえないことなど、言い出したらきりがなが、何故、どうしてできない、という疑問が付きにくい場面に何度も出くわしていた。物理的に綺麗にしてもそれを使う人たちの気持ちに伴って綺麗でないと本質には遠く及ばないと、いつか剥がれる化けの皮のように。以前から感じていたことが間違っていなかった、一流と言われる会社に勤めていることで驕った意識があることの証だと、偉風は社員への憂いを感じ、そして、以前の自分とも重ね、案じていた。

ある日、どうしたものかと思ひあぐねている偉風の葛藤を心配するかのようにある少年

が偉風の眼前に現れる。地下鉄の駅のホームにその少年はいた。その少年は真剣な眼差しであるポスターを穴があくほど見つめ、時折、首をかしげている。ポスターとは、所謂、マナー啓蒙ポスターのことである。数年前から『席を譲ろう。大声はやめよう。リュックは前に抱えよう』など、誰しもができるであろう行動をわざわざ手間やお金をかけ多くの地下鉄の駅に貼りだしているポスター、それである。偉風は「あの子、なんで首をかしげているのかな」と、気にとられたが、この時世、気軽に声をかけることさえ憚られるため、遠くから見つめることしかできなかった。「わざわざ言う必要もない、敢えてマナーを強調するということは、圧倒的にマナーがない、気配り、気遣いが出来ない人が多いということの裏返し」であることに、首をかしげることで、社員も同じだと気づかせるために現れてくれたんだと、偉風は感じとった。と、同時に、『それだけみんな、心に余裕がないんだよ、前の君も同じだったんだよ。君がそれを今度は教えてあげる番だよ』と少年に心を真っすぐに衝かれた気がした。その少年が偉風のおぐねいていた霧を晴らした瞬間であった。

日々、護送船で運ばれている遣心は相変わらずであった。意思も力もなく、このままでもいいのかという思考はもはや妄想に近いあり様であった。遣心は従業員百名を抱える工場を経営する父と母の次男として生をうけた。元々、この工場は祖父が一代で築き上げ父に受け継いだものである。エスカレーターで幼稚園から大学まで上げられる学校に通い、順風満帆な人生のスタートであった。成績は中の中、何か秀でたものはなかったが、無難な学生であった。遣心の兄である長男は、現在、キャリアとして省庁に勤めていることもあり、遣心自身もこのまま大学に行き数年間は一般企業に勤め、その後、工場を継ぐと、疑いの一片もなく思っていた。普通は長男が、と思われるが長男は遣心とは違いくかなりの秀才で工場を継ぐというより国をよくしたいという大きな思想を持ち、エスカレーターの最終地点でない日本最高学府に現役で進んだ。兄は高校の頃から優しく人に気遣いができる遣心のほうが工場の経営にあっている、「遣心、頼むな」と遣心の頭を撫でながらいつも言っていた。遣心は中学の頃からある意味、引かれたレールに乗っていた。

そんなある日、工場製品でお客様の製造ラインを停止させてしまうトラブルが発生した。遣心に乗っていたレールが崩れていく瞬間である。トラブルの根本原因が何であったのか、本当に工場製品に不具合があったのか、は曖昧のままであったが、父はその責任を取り社長座を親族ではない専務に譲った。専務は父や社員からの信頼も厚く、長年、祖父の番頭としても活躍してきた人物であり、以外の候補は想定できなかった。顧客からの信頼を取り戻すことにも時間はかからなかった。遣心が高校三年の春の事である。会社の規模は縮小したものの社員全員を継続雇用でき経営自体問題はなかった。ただ、山下家としては、損害賠償請求などに対応するため多くの資産を吐き出し、責任を感じていた父は、専

務からの相談役の要請も固辞し、自ら会社を去った、最後まで誠実な父であった。父と母は、母の実家がある田舎へ引っ越し、元々母の希望であった喫茶店を二人でほそぼそ始めた。長男は既に入省後であったため、問題は遣心である。遣心は「大学までは出たほうがいい。お金は出してやるから」という専務の言葉に有難さを感じてはいたが、自分だけ甘えるわけには行かないと、高校卒業までは工場隣地の元実家に住まわせてもらったが、高校卒業と同時に元実家を出た。僅かながらの卒業祝いという当面の生活費と。工場への就職という選択肢もあったが、もう山下家でない、新たに生まれ変わった会社で、自分がいること自体、情けが仇とは思わなかったが、選ぶ肢ではないと感じていたからである。そもそも、生まれた家庭、環境がよかったからであって、自分の努力により今の自分があると思ったことも、そんな意識すらない遣心にとつて、流れを素直に受け入れることが、「人生たまたま」、が、心柱である遣心の当然の選択であった。工場経営の裕福な家庭に生まれず、ともすれば、今日生きていけるかどうかの家庭であれば、今までの生活もあり得ない。今までの生活があるのは自分が凄いからなどの驕りや、今の状況に対してどうしてこんなことになってしまったのか、という他者への怒りの気持ちを持つこと自体、烏澁がましいと感じていた。だからこそ、傍から見れば、「遣心、大変だけど頑張れよ」と言う先生や同級生もいたが、心配してくれていることは理解できるものの、何が大変なのか、何と比較して大変なのか、大変という表現が出てくることは、今、遣心がおかれている状況が以前と比較して落ちた、悪くなったと他者が何かと比較した結果であったに過ぎず、大変だと思っただけではいかなかった。遣心からすれば人のお陰で生きてこられた人生であり、比較という人と人との優劣を決める行為など頭の片隅にもなかった。遣心は高校卒業後、学校から紹介された都内の企業に就職した。特にこれといってやりたいこともなく、そもそも一旦レールを下ろされた身であり何かを望むこともなかった。

仕事はキャビネ、机や椅子などオフィス用品を販売する営業、仕事内容に特段不満はなかったが、一度販売してしまうと長期間利用されるものであり、常に新規顧客を獲得しないといけない職性には骨が折れた。表向きはみんな頑張ろうと言っても、営業にはノルマはつきもので、元々比較ということが脳の一端にもなかった遣心もいつしかその比較の渦に飲み込まれていた。「あいつは今月3件、俺はまだ1件」、とお客様に価値を提供するという仕事の本質ではなく、如何に受注を獲るか、如何に件数を伸ばすかだけに思考や行動が向いてしまっていた。遣心らしくないことに本人も気づけず。

そんなある日、同僚が突然退職することが社内に掲示された。一ヶ月程度に渉る上司の説得もあったようだが、本人曰く「もう疲れてしまった」、が理由であったようだ。みんなの信頼も厚く営業成績もトップクラスであったにも関わらず、である。こういうことが起きると「あいつは弱い。期待していたのに」と批評する声があるものである。逆に言

えば人はみんな弱いものであり、後ろ指をさされるようなことでは決してない。「疲れてしまった」ことも、たまたま、そういう要因とタイミングが幾重にも同時に襲いかかってしまった結果であり、人は誰でも等しくそうなる可能性がある。幸いにもそういう状況になっていないということだけで、恰も自分は強いと勘違いする内的理解力に欠けている人も多いが、そういう人達は弱者で心のバランスを取るといふ最低な手段を選択し回避しているものである。あのホームレスの方が言っていた、なってはいけない側の人間である。人間の心に強弱などいう物差しを置くこと自体、違和感であると遣心は常々思っていたが、最近の遣心はそれも意識することさえできず、そんなたゆたってしまった遣心の心を同僚の離職が物差しの上にのせてしまったのである。心の強弱、比較という元々遣心の概念になかったことがいつしか遣心にまとわりついてしまった。そんな遣心は、気持ち下がを向いてしまう日々が続いていた。ある日、一部の心無い先輩達はその離職者の話をしていた。当然、いい内容ではなく負け犬などの類の会話であった。タイミング悪くそれを遣心が耳にしてしまった、その瞬間、かなり荒げた声で「ちょっと待ってください。あいつはそんなやつじゃない、あなた達も同じ状況になれば、同じ道を辿らざるを得なかったかもしれないのに。自分たちは負けない、強い、大きな勘違いです。陰でしかも離職した仲間の噂をするようなやつはよっぽどずるく弱いんじゃないんですか!!」と捲し立ててしまった。同僚が「山下、ちょっと待て!」と静止していなければ、手までは出さないものの、ついには罵詈雑言、放送禁止用語までも発することは容易に想像できた。同僚に諭された遣心は、「ついカッとなつてしまい、すみませんでした」と、先輩たちに頭を下げた。先輩達もそもそも話していた内容も褒められたものではなかったため、「もういいよ」と、謝るまでの誠実さには欠けていたが、どうにかその場は収まった。遣心はその同僚に「ありがとう。止めてくれてなかったら、どうなっていたか。自分でも怖い」「もう、忘れろ、気にするな。気持ちにはわかる」と、同僚はポンポンと遣心の肩を叩き去っていった。遣心が同僚から寸前で救われた場面であった。

なんとか生きている感覚で過ごしていたある日、遣心は通勤で殺伐した駅で杖をついた女性が人波に乗れずエスカレーター手前でおどおどしていることに気づいた。まさにこのあたりが人間の本質を表している一端であるが、その女性がまるでいないかのようにその波が止まることはなかった。すると、それを静止する小さな手が。あの偉風が見たポスターの少年であった。もちろん、遣心には初見であったが。そして、女性をその流れにのせてあげたのである。遣心は、その素晴らしい光景を目の当たりにし、うだつのあがらない自分への苛々や人のせいばかりにして何も変えてこなかった自戒も相まって、魂の震えを感じ、自然と眼が潤んでいた。同時に「年を重ねても、女性を無視した多くのあの大人達の年齢になつても、続けてほしい」と遣心はその少年の背中に声をかけていた。そ

して、遣心は自分自身にも問いかけた、「自分が先にこの場面に直面していたら、少年のように出来ていたのか。小さい頃なら出来ていたんじゃないか。人への気配り、気遣いも、今、全く出来ていない。それができるようにと『遣心』、心遣いの意味を込めて両親がプレゼントしてくれた名にも関わらず」と、その殺伐とした駅のホームが遣心には滲んでいった。その涙こそ、あの少年が遣心にきっかけを与えた証であり、結果、壊れそうだった遣心の心を救ったのも同然であったが、あの同僚、そしてこの少年の『お陰』であることを遣心はまだ意識できずにいた。

いつもなら、この駅で乗り換え別の船に乗り会社へ向かうが、「今日は直行します」と遣心は入社して初めて会社に嘘をつき、改札を出た。あの少年の行動を見た感動、その反動による自戒も含め、今の心持ちのまま出社するより、一旦、心を落ち着かせることがいいと遣心としての懸命な判断であった。いつも営業でも訪れる街であったがゆっくりにゆっくりに歩を進めてみた。普段ならイライラしてしまうだろうスピードだったが、そのゆったりが遣心に今まで見落としていたものに気づかせてくれた。「こんなところに花屋さん、小さな洋服屋さん、ここ曲がれるんだ、何十回も来ているのに全く気づかなかったな」そんなことを考えながら路地裏という表現がピッタリの小路に足を向けてみると、小さな珈琲屋を発見、チェーン店のコーヒーショップではない、漢字が似合うお店だった。『カーラン、カーラン』、いい響きである。遣心はマスターに会釈し、カウンターに腰掛けた。その瞬間、駅でのそれとは比べものにならない涙が、溢れでた、遣心は自分でしばらく止めることができなかつた。まだ、落ち着きを取り戻していかない心境の上に、きっと、まだ見ぬ両親の喫茶店とこの喫茶店が自然と重なったことがそれにつながったのであろう。「父さん、母さん、元気にやっているかな。全然、連絡とってないな」と、両親を思い出し余計に涙が溢れた。もちろん、遣心は意識していないが、あのホームレスが言った、「泣いていい、さらけ出していい」、遣心の姿はまさにそれであった。マスターは注文を受けていないものの遣心の様子から何も言わず待っていてくれた。「あつ、注文しないと」、遣心は放心状態から我に返った。カウンターの前にはホット一五〇円と小さく手書きで貼り付けてある、「この時世で一五〇円って」と、遣心は店構えとは異なり業務用を温めカップに入れて出すのか、と若干邪推してしまつたが、数分すると、珈琲をドリップするあのいい匂いが遣心を包み、そして、マスターが丁寧に心地よさを運んできてくれた。「ああ、ほっとする」遣心の目の前の窓の先に、かすかに人が行き交う街が見えている。何か温度を感じない物のように遣心の目に映っていた。遣心自身の心がそうさせたのか、行き交う人達の無表情さがそう思わせたのかはわからないが、その状況を客観的に見れること自体、遣心は少し気持ちの平穏を取り戻しはじめていた。「さあ、行こう！ マスターご馳走様でした。また、来ます！」と、一五〇円を手渡し、マスターの無言の「無理するなよ」、

という笑みを残り香に店を後にした。「きつと、父さん、母さんの喫茶店もほっとさせてくれるいい喫茶店だろうな。今度、行ってみよう」。離職した同僚のことは今でも淋しい気持ちでいっぱいであったが、その淋しい気持ちを過度に持ちすぎることは、結局、そういうことを悲しんでいる優しい自分を演出しそれに浸っているにすぎない、それこそ、同僚に失礼である、「また、一杯、飲みに行けばいい」、「今は、このきつかけを大切にしよう」と、何年ぶりだろう、自然な笑顔で、遣心はかわりつつある自分を少し感じていた。ようやく、「人生たまたま。いろんな人のお陰様で生きていけている。謙虚な姿勢、感謝の気持ちが大切」と、競争、比較という渦から抜け出そうとする、本来の遣心がそこにはいた。そして、同僚や少年の『お陰』に触れたことにやっと気づくことができた。遣心は目をとじて「ありがとう」と二人に呟いていた。

そして、この少年に諭され導かれた偉風と遣心が出会うことになる。遣心は心境の変化もあり、「ありきたりかもしれないが、初心に戻ってお客様に向き合い、考える、営業を目指してみよう」と、もう護送船でない、会社に行くための電車の中で、うだつがあがるかのような思考に変化していた。今まで営業をかけたことのないエリアへ踏み出してみたくもその変化の一端である。偉風は継続してオフィス内を巡回し気持ちよく多忙な日々を送っていた。一枚のFAXが偉風に届く、遣心の会社からの販促ちらしであった。「オフィスでお困りごとはありませんか。新品から3R対応の商品も取り揃えております。ご相談だけでも構いません。是非、ご連絡下さい」、偉風は無意識に電話機を取っていた。「お世話になります。オフィス備品空創の山下です」「私、大手町商事の高次と申しますが、FAXを見てお電話しました」これが、偉風と遣心のファーストコンタクトであった。何度かのやりとりを経て、偉風のオフィスへの空想のリユース品の納入が決まった。納入当日、遣心はあの大手町への初納入ということもあり、前日に新調した靴で偉風のオフィスへ向かった。偉風は、少々身構えていた遣心を穏やかな顔で迎え入れてくれた。通常、このような備品の搬入、設置は、依頼主が指示、あとは完了後に表面的な確認を行い終了することが慣例であるが、偉風は違った。依頼主である偉風も遣心と一緒に机を運搬し、設置までも、和衷協同の精神で行ってくれた、偉風の額に流れる雫がそれを物語っていた。「こんな超一流の会社でも、俺たち業者と一緒にやってくれる人があるのか」と遣心は売上より何よりそれが嬉しかった。あの事件前、あの光、そしてあの少年に出会う前の偉風であれば、「そんなこと業者にやらせておけ」で終わっていたであろう。遣心にしても、少年のあの善行を目の当たりにした後であり、今まで以上に心が動いた。無論、遣心が偉風の生い立ち、あの事件、消えてなくなってしまうそうだった月日を知る由もなく、今、出来る自分の役割を全うする偉風が眩しく映ったに違いない。偉風にとっても、遣心は偉風の会社のことを考え、新品でなくリユース品を勧めてくれた、自社の利益よりもきちん

と顧客満足に応えようとするその気遣いの姿勢に敬意を表していた。他人は自分を映す鏡というが、この二人の出会いには偉風と遣心の互いの鏡にその眩しさを互いに映し出していたに違いない。「高次さん、このチューリップのポスターとてもいいですね。確か、花言葉は思いやり」「よくご存知ですね、そうです、思いやりです。少々反対もあったのですが、みんなが心に余裕をもち、人への思いやりの気持ちが会社に溢れてくれればと思っ作ってみたんです。社内掲示まではドキドキだったのですが、いざ貼りだしてみると、『小さい頃から見ていたこともありとっても落ち着きます』という声が多くほっとしたことを覚えていきます。あつ、でも自慢できることではなくて、これは名も知らないある少年に教えられたんです」とちょっと気恥ずかしそうな偉風を見て、「少年……。まさかね。でも、俺もあの少年に教えられたんだよな」と遣心も苦笑いを浮かべていた。二人の出会いのほんの一遍である。あの少年の『お陰』により、二人とも何かを乗り越えられたこのタイミングでの出会いだったからこそ、こんな安らぐ二人とも笑顔のシーンが生まれたのである。今の偉風と遣心であれば与えられた役割に向き合い、生を繋ぐという使命を全うしようとすることは想像に難くない、そして、二人のように、誰にでもきつかけを与えてくれる、誰しもがそのきつかけに気づけること、が等しくあつてほしいと願い、この二人の回顧を終える。

生まれた環境もその後も生き様も異なっている偉風と遣心ではあつたが、この二人のうな生は決して特別なものではなく、人は誰しも無難でない生を、様々な悩みを抱え、歩んでいる、まさに十人十色、いや、十色では表しきれないであろう。それでも人は与えられた役割に辛い日も悲しい時も懸命に向き合っている。必要悪という言葉があるが、偉風や遣心とは違い悪役を与えられてしまった人も多くいる。もがいても、抗いてもどうしようもできない状況で苦しみ、いつしか、悪ということさえ感じなくなってしまい一生を終えてしまう人、その悪によって社会的なバランスがとれているということにも気づくこともないままの悲しい生もあるだろう。人を殺めてしまったというニュースも後を絶たない、対岸の火事ではない、人間の本质は同じであることを考えれば、誰しもがその当事者になつてしまう可能性があること、罪は許されるものではないが、非難、否定より悲痛を感じざるを得ない。もしも、自分もその人たちと同じような生い立ちや境遇であつたらと思うと、苦しく切ない気持ちが入り込んでくる。だからこそ、普通に歩んでゆける役を与えられたなら、四季を自然と受け入れるのと同じように、等しく人には喜怒哀楽という感情があることを、自分も同じであることを、素直に受け入れ、人への気配り、気遣いが無意識に出来る人間でありたい。もがきながらも役割に気づき懸命に向き合えるようになった偉風、渦に巻き込まれながらも本来の自分を取り戻そうとしている遣心、過去の成功体験にとらわれず、経験や反省を伝えていくという新たな役割を見出したホームレスの方々、

そして聖人のようなあの少年に改めて教えられた気がする。比較という他者を下に見ることと自分の存在価値を認識し安堵するような愚かな行為ではなく、人間の根底は同じであることを自覚し、今、物理的に見えている存在は、みんな、心に化粧をしてその役割を懸命に、使命を全うしようとする姿であり、他者から見れば自分も同じであることを感受することで、相互に向けられるその眼差しは穏やかで、そして優しさに溢れていくのではないだろうか。時には怒りの感情におし潰され、役割を演じることができなくなってしまいう人もいるだろう、でも、そんな眼差しがこの世に溢れていけば、誰かがその人の心に気づき、寄り添ってあげることができはるはずである。誰しもが演じることができなくなったり、逆に、寄り添ったり、まさに『お互い様』、人生という長い舞台では幾度となく起こりえることである。だからこそ、あの少年が手を差し伸べたように、『お互い様』『お陰様』、魔法の言葉である『ありがとう』が溢れる、そして弱さをさらけ出せる舞台であってほしい。その舞台では多くの人達が笑顔で演じ、そして多くの幸せな『生』が繋がれていく、それが、唯一、思考ということができる高等な動物に与えられた使命を全うすることそのものであると思う。怒りで動物に戻ってしまうかもしれないという恐怖に抗うことも、時には逃げてしまうこともあるかもしれない、それでも、微かな力であっても、人として生を受けたものとして、私という唯一無二の役を与えられたことに感謝し、演じきることで、その使命を全うし、そして、終には化粧をおとし次の幕へ繋いでいこうと、心に刻む。